特別活動が豊かな生活を創る ～アンチ独り法師（ひとりぼっち）へのアプローチ～

小池　　幸

はじめに

今年度から，「特別活動の理論と方法」を受け持っている。前期は10数名，後期は40数名（両期ともほぼ１年生）の受講である。後期，授業開始まで少し時間があったが，授業準備のため教室に入ると，１名の学生がすでに着座していた。私が，

「大学生活には慣れたかな。」と聞くと，

「まだ，うまく慣れません。私は，地方出身で独り住まい。地理もよくわからなくて。」

「えっ？」，と内心思ったが，「部活かアルバイト，やっているのかな。」と続けると，

「何もやっていません。なので，友達もいなくて，毎日，アウェー感でいっぱいです。」

『独り法師（ひとりぼっち）』という言葉が，マスメディアを通して拡散され，特に，大学生の人間関係について，ネガティブな今日的課題として揶揄されている現状がある。さらに会話が続く。

「小・中・高等学校と大学で一番違うところは何かな。」

「う～ん，･･･ 自分の椅子と机が無い，･･･ 自分がほっとできる自分の教室が無い ･･･ ことかな。」

意外な返答であったが，言い得て妙である。会話から，埼玉工業大学という，何か得体の知れない大きさに，自分の居場所への不安が重なることから，悶々とした状況に陥り，さらに，前述のアウェー感が拍車をかけ，大学生としてのアイデンティティーが今一歩確立されない，あるいは自信が持てない，何か閉塞感に覆われているということが浮かび上がってきた。大学に入学した学生は，学生証を保持する。恐らく，この学生証が唯一，自分が埼玉工業大学の一員として自覚できるものではなかろうか。小・中・高等学校までは，一般的に学校への心理的距離（友人，自分の学校，自分の

先生，地域の方々）や物理的距離（学校が家のすぐ近くにある。少なくとも，独り住まいの生活では無い。）が近いのが常である。大学では，「ここはどこ？　私は誰？」の言い回しがフィットする。それ故，支配的な「独り法師（ひとりぼっち）感」から，部活動，サークル活動，ゼミ，アルバイト等に消極的にも積極的にも身を投じていく傾向と，さらなる「独り法師（ひとりぼっち）への埋没」が顕著になる。勿論，勉学が基本であることは王道であり，大学生活への期待感から，小・中・高等学校での生活をさらに発展させるため，自主的，実践的，自発的，自治的に対応する学生諸氏は極めて多いのは言うまでもない。留意すべきこと，この孤独感（独り法師（ひとりぼっち）感）は，いわゆる孤独を好む心理的傾向のものとは区別されなければならないものであり，本稿の内容進行の前提としてご理解いただきたい。最後に，現状からの脱却について問うと，「自分の席とか教室は無理だけど，他の人と話して，友達をつくりたいな。」という願い，あるいは祈りともとれる思いが吐露された。程度の差こそあるが，多かれ少なかれ学生諸氏一人一人の心に，同様の思いが存在することは否定できない。時代の進捗に係わらず，いつの時代でも色褪せない『友達』の存在と『関わり』の重要性が狭小の空間ではあったが，明らかになった瞬間でもあった。

【資料１】をご覧いただきたい。このアンケート調査は，後期受講者を対象としている。回答者の人数，設定項目等について，深く吟味検討を行っていないが，現象や傾向を大まかに把握しようとしたものである。「友達」についてのイメージとして，約６割の学生が「気軽に会話が交わせる関係」と回答している。また，区別の規準としては，名前と顔が一致し，且つ直接的な会話のやりとりが成立するフランクな関係をあげている。特に，大学に入学したが，「独り法師（ひとりぼっち）」の学生にとっては，授業における『関わり』がアンチ「独り法師（ひとりぼっち）」への方策の一つとなるものと見て取れる。

【資料２】をご覧いただきたい。このアンケート調査は，資料１と同様，後期受講者を対象としている。今の自分がどのような他者とコミュニケーションをとっているかを，複数回答でまとめたものである。自宅通学者と独り暮らしに分けて集計している。注目すべき点はいくつもあるが，特に，

自宅通学者，独り暮らしの学生双方に共通する，一番関係が深い他者として，家族とともに「埼工大の授業での友人」が双璧を為しているということに焦点を当てることができる。資料１同様に，授業における「関わり」がアンチ「独り法師（ひとりぼっち）」への方策の大きな柱となることが，方向付けられたといっても過言ではなかろう。

校種間の接続の課題について，「小１プロブレム」，「中１ギャップ」という状況が指摘されている。「小１プロブレム」は，入学してきた１年生が，各々（おのおの）の生活習慣を学校で思い思い表現することに起因し，学校のルールである，例えば，他者の話を最後まで聞く，あるいは先生の許可無く離席しないなどが守られず，学級の円滑な運営が停滞あるいは阻害されている状況であり，「中１ギャップ」は，入学してきた１年生が，中学校での生活スタイル，例えば，学習や部活動，先輩後輩の人間関係，卒業後の進路のリアルな現実など，小学校ではほとんど感じていなかった状況にうまく対応できず（相違の溝を埋められず），生徒指導上の課題，例えば極度の不安や劣等感，自信やアイデンティティーの低下や喪失，不登校を抱えてしまう生徒の状況である。補足すれば，小学校１年生もプロブレムではなく，ギャップの範疇であるが，幼稚園や保育園の年長園児と小学校１年生の児童の思考では，ギャップ感を自覚できないととらえることが自然と思われる。それ故，ギャップにプロブレムが包括されていると換言できる。

もちろん，この状況はどの学校，そして，どの児童生徒にも必ず見られるものではないが，全国の多くの学校でこのような傾向が現実化している報告がなされており，中心的な教育課題としてクローズアップされている。

ところがである。国民全て教育評論家的立場からは，この状況も恐らく現象面の総論のみの取り上げに終始してしまう可能性は否めない。アンチとしてさらに一歩進めれば，「小１プロブレム」，「中１ギャップ」のみならず，「高１○○」，「大１○○」，そして，大学を卒業し，社会人１年生も，「社１○○」という問題，課題が横たわっているものと考えることが賢明であろう。さらに二歩進めれば，課題解決，現状改善の具体的方法に必然的に辿り着くが，学校，大学を始め，様々な組織が解決，対応に向けて既に着手していることもまた事実である。こうすれば，こうなるという，必ず今より一段上がるための常備薬や特効薬は現在各組織ともこぞって開発・構

築中であるが，決定的なものは見いだせていない･･･。恐らく，この後も教育現場と社会状況の変化とのせめぎ合いが継続し，平行線の様相を呈するものと思われる。しかしながら，１年で１歳成長する子供たちは，現実的には個人差があるにせよ，全員がこの目に見えない「ギャップの」門をくぐる宿命から逃れられない。

ここで，改善解決の一方策が求められるのは論を待たず，前出した『友達』と『関わり』をキーワードに考えるとき，小・中・高等学校の教育課程の一翼を担っている「特別活動」にスポットを当てることができる。

「特別活動ってどういう勉強だかわかるかな？」と質問すると，ほぼノーリアクションの場面がしばしばであるが，「クラスで文化祭や林間学校での出し物を決めたり，みんなで修学旅行に行ったりしたことあるかな？」と問うと，全員が即座に「イエス！」のリアクションになる。続けて，「生徒会の活動やボランティア活動は？」と問えば，「私，中学校の時，生徒会の副会長をやっていました。」とか「放送委員会でみんなと相談して，いろいろな曲を全校放送をしました。」など，もう，みんな我先に経験談のオンパレードとなる。そう，「特別活動」は難しい勉強ではなく，また，いわゆる座学でもなく，自分を，みんなの中でしっかりと生かし，係る集団をよりよいものにしていくという実践行動学というべき教育活動，「自分とみんな」を常に意識する教育活動なのです。続けて，「小・中・高等学校の学校生活で一番楽しかったことは何かな？」と問えば，「友達と話し合ったりいろいろなことをやったりしたことかな。」がトップであり，「小・中・高等学校の一番の思い出は何かな？」と問えば，「修学旅行！」が独占状態である。何故，修学旅行がナンバー１か？　言わずもがな，『友達』と心底触れ合えるからである。中には，様々な理由で，小・中・高等学校の生活を肯定的にとらえられない学生もいるかもしれないが，みなさんが教育実習や職業としての教員になった時，子供たちは『友達』との出会いと『関わり』を待ち望み，『友達』をつないでくれる先生との出会いに期待している。「独り法師（ひとりぼっち）感」からの脱却は，まず，各々が集団との『関わり』に歩を進めることである。

周知の通り，『教員免許』取得には，教育職員免許法に基づき，多くの指定内容の履修が義務づけられている。この中にあって，学校現場におけ

る『教育課程』を構成する教科等のカテゴリーは，
○小学校では，国語，社会，算数，理科，生活，音楽，図画工作，家庭，体育，外国語，特別の教科道徳，外国語活動，総合的な学習の時間，**特別活動**
○中学校では，国語，社会，数学，理科，音楽，美術，保健体育，技術・家庭，外国語，特別の教科道徳，総合的な学習の時間，**特別活動**
○高等学校では，各学科に共通する各教科として，国語，地理歴史，公民，数学，理科，保健体育，芸術，外国語，家庭，情報，理数，主として専門学科において開設される各教科として，農業，工業，商業，水産，家庭，看護，情報，福祉，理数，体育，音楽，美術，英語，総合的な探究の時間，**特別活動**
以上のように規定されている。

本学では，小学校の教員免許取得はできないが，中学校，高等学校の教科別の免許取得が可能である。また，言うまでもなく，中学校及び高等学校の教育は，小学校の教育活動の上に成立しているものであり，小学校の教育課程及びその内容の把握は，児童生徒の発達的特徴を系統的に理解し，各自の教員免許で各校種に於いて教育活動に尽力する上で極めて重要なファクターとなるので，スルーせずに押さえておくことが肝要である。

この中にあって，「特別活動」はどの校種においても，そして，どの教員にあっても必ず係わらなくてはならない教育活動であり，内容熟知とそれをベースにした積極的な実践は，係る教育課題解決改善の常備薬・特効薬のみならず，本来，「特別活動」が目指す，一人一人の豊かな成長と，皆で創り上げる望ましい市民社会の構築に欠かせない教育活動として，今後益々期待されている教育活動でもある。各論に入る前，文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センターの「特別活動」充実の効果を提示しておく。
①各教科等（国語，数学・・・等）で育成した資質・能力を実践的な活動を通して，社会生活に生きて働く汎用的な力として育成できる。
②学級経営に役立つ。
③学力向上につながる。
④キャリア教育の要である。
⑤生徒指導上の問題を未然防止できる。
⑥道徳的実践に結びつく。

平成32年度（実際には新元号２年度　西暦2020年度）より，新しい学習指導要領が小学校を皮切りに，１年遅れで中学校において，２年遅れで高等学校において全面実施される。既に，全面実施に向けた移行措置が日本全国の各小学校で一斉に始まっており，内容の理解と定着が図られているところである。

「特別活動」の目標はこれまで，長期間に渡って設定されていたものを，さらに統合発展深化させ，次のように改められた。（ここでは，中学校の目標について掲出する。）また，目標は小・中・高等学校とも系統的に構成されており，文言表記も，ほぼ同一のものとなっている。

◆新目標

○中学校

集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ，様々な集団活動に自主的，実践的に取り組み，互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して，次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

(1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し，行動の仕方を身に付けるようにする。

(2) 集団や自己の生活，人間関係の課題を見いだし，解決するために話し合い，合意形成を図ったり，意思決定したりすることができるようにする。

(3) 自主的，実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして，集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに，人間としての生き方についての考えを深め，自己実現を図ろうとする態度を養う。

◆旧目標

○中学校

望ましい集団活動を通して，心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り，集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的な態度を育てるとともに，人間としての生き方についての自覚を深め，自己を生かす能力を養う。

活動内容の変更は無く，小学校は①学級活動②児童会活動③クラブ活動④学校行事，中学校は①学級活動②生徒会活動③学校行事，高等学校は①ホームルーム活動②生徒会活動③学校行事で構成されている。指導原理は，「為すことによって学ぶ」ことであり，特質は①集団活動②自主的活動③

実践活動の３点に集約できる。さらに，今回の学習指導要領「特別活動」では，児童生徒一人一人に，「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」これら３つを統合的に進める力の育成が，３つの学び（主体的な学び・対話的な学び・深い学び）の至上命題の基，様々なアクティブラーニングからのアプローチとなっている。

ここで留意しておかなくてはいけないことは，「特別活動」は個々が生かされる集団活動が大前提となっているということである。前出した孤独を好むことが好きな子供たちを無理に集団に引き込むことは配慮が必要だとか，子供たち一人一人の思いを尊重すべきで，何でもみんなみんなで行う必要があるのかという指摘が当然のことながら入る。さらに，集団活動は一番つらい人間関係で，このみんな一緒にという集団の同調圧力が強すぎ，逆に，いじめ等に代表される負の人間関係に発展する危険性も含んでいると指摘する人もいる。しかしながら，そもそも論に立ち返った時，人（人間）は意図的にも無意図的にも必ず他者（社会集団）と係わらなければならず，命持つ我々は，誰もこの宿命の例外にはなりえない。この中にあって，「個が生かされる集団活動」を中核に，個と集団の相互関係や相互作用を議論した方が得策であり，教育課程の「特別活動」は，まさにこのことが展開の拠り所である。

学生諸氏は，誰もが小・中・高等学校時代に，意識的にも無意識的にも数多くの「特別活動」の教育活動による学校生活を体験している。小学校１年生の入学直後，全校児童で行った新入生を迎える会では，６年生の先輩がとてもビッグに見えたことと思う。高校３年生の時に行った文化祭。みんなでいろいろと話し合って決めた出し物を，役割分担し，ステージ上で見事やりきった。みんな号泣したことだろう。各自いろいろなことが去来し，いわゆる青春の１ページを飾っているはずである。

それでは目を転じて，大学における「特別活動」はどのような存在なのであろうか。小・中・高等学校までは共通の時間割表があり，「特別活動」は授業時間として「学級活動」若しくは「学活」（高等学校では「ホームルーム活動」若しくは「Ｈ・Ｒ」）として，実施の状況は心許ないが，毎週位置付いていた。この「学級活動」は様々な活動のベースとなり，生徒会活動や学校行事の円滑且つ充実の過程に寄与していったはずである。ところが，大学では個々の時間割であり，いわゆる学級やホームルームの形成は困難が伴う。そもそも，狭義の学級やホームルームではなく，大学それ自

体が学級であり，ホームルームと自覚することが適切であろう。このことは，実社会の一員としてのモラトリアム段階である大学生に課せられた命題でもあろう。このようにとらえるとき，大学に於いては，小・中・高等学校までに培った「特別活動」の成果としての経験値を，自治的な活動が多くの割合で保証されている大学生活に，「自ら気付き，考え，実行していく」という志を持ち，意思決定能力と合意形成能力をベースに，参加・参画・貢献していくことが求められる。さらに，「特別活動」について指導する筆者には，そのことを可能にする具体的な対応策が求められる。以下，本授業で取り組んできた実践について３つ紹介する。

その１　『今日の一言』への感想文作成（【資料３参照】）

筆者が現職最後の校長時に４年間勤務していた小学校に於いて，毎朝全教職員を対象に配布していた，子供たちが織り成す様々な活動から派生する，言葉・表情・仕草等において印象深かった瞬間を書き留めたエッセイを毎時間学生に配布し，各々の自由な感想文作成を継続した。取組のねらいは，①子供たちの感性に寄り添える教師としてのしなやかさの獲得，②各自が小学校時代に経験したこととのオーバーラップによる，思い出空間の拡大，③『友』と交流した確実な体験の確かな経験値としての追認である。取組の最初は大学生（大人）としての固定概念（もう，子供ではないという意識）からか，戸惑いを見せる学生が多かったが，徐々に自分の小学校時代をオーバーラップさせ，ねらい①②③を無理なく自分の心に刻む展開となってきた。子供たちの豊かな感性に驚いていた学生諸氏が，次第に今の自分の思考及び活動のバックグランドとして活用しようとする姿勢から，小・中・高校生と向かい合う，まずは教育実習生としての心構えの構築が示された。

その２　ネームボトルの作成

資料１に示されている『友達』のイメージ及び『友達』の区別及び，資料２の他者との関わりで一番関係深い「埼工大の授業での友人」から，友達関係の構築には，各々の名前と顔の一致が効果的であることが読み取れる。そこで，空きペットボトルのパッケージをはがし，ペットボトルの胴体部を白紙でぐるっと巻き，

各々の名前を３カ所に記載したペットボトルを利用したネームボトルを作成した。筆者の授業には毎回このネームボトルを持参することになる。持参したネームボトルはすぐ机上に置かれ，自分が誰であるかを主張する分身となる。無意識のうちにおぼろげながらに見ていた他者の顔と名前が，意識的に認知できるようになり，本授業での出会いから関わりまでが円滑に進むようになった。勿論，他の授業においても，ネームボトルこそ机上にないものの，本授業で関わった他者を友達として認知する空間として効果的に活用しているものと判断できる。関連し，筆者も同様なものを作り，学生とともに歩む展開から，双方の心理的距離もかなり近くなったものと理解している。

【ネームボトル】

その３　グループディスカッションの継続（【資料４参照】）

本授業は講義とともにグループワークを主軸に展開している。１グループを６人で構成し，後期固定制とした。スタート時は，学部は同じでも，顔は見たことがあるが名前は？　という思いを巡らした学生がほとんどであった。上記その２で作ったネームボトルを持ってグループを組み，さらにもう一つのペットボトルで，「司会」「記録」「メンバー」といった役割分担が明示されているものをグループで用意した。いわゆる話合いのグッズは揃ったが，『関わり方』すなわち「ディスカッションの仕方」が課題となってきた。授業なのでフォーマルな進行にはなるが，そこは学生諸氏，各グループごとにアドリブを効かせ，友達の条件である「親しみやすさ」の場の雰囲気作りに尽力した。「特別活動」は児童生徒一人一人の意見や考えを最大限に重んじて展開される教育活動である。それ故，他の講義や活動において展開されるディスカッションとは少々相違が生じてくることも考えられるので，【資料

４】のように「特別活動における話合い（ディスカッション）の概略」を提示した。これをベースに，学生一人一人が，合意形成，意思決定を目指していく過程の中で，他者から友達へと変化していく人間関係に気付き，さらに相手の心情の読み取りまで可能になる人間関係の高まりを確実に自覚しだしたことは大きな成果である。

おわりに

大それた取組ではないが，いただいた指導時間の中で学生同士を如何につなぐか，如何に望ましい人間関係（友達関係）を築くかは筆者のこれからの終わりなき課題である。毎回作成するリアクションペーパーの「小池先生への疑問・質問」欄には，回を追って様々な感想が増えてきた。本テーマに関連すれば，固かった授業の雰囲気が次第に丸みを帯びてきて，出席することが楽しくなったというものが多く，また，関わることによって，いろいろな人と交流でき，平素意見交換や情報交換ができるようになってきたという感想もあった。さらに進んで，一緒に出かける機会も出てきたという変化も生じてきた。教育実習生として，そして職業としての教員として赴く前に，まず学生諸氏が「心と行動の独り法師（ひとりぼっち）感」を取り除き，来たる日，そう，実際の児童生徒の前に立つ場面に備えていただきたい。みなさんは，「独り法師（ひとりぼっち）」ではありません。恐れず一歩前へ，夢と期待を持って，みんなの中に飛び込んでください。「特別活動」は，いつもみなさんの心の支えです。

《参考文献》

・中学校学習指導要領（平成30年３月　文部科学省）
・楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）（平成30年７月　文部科学省国立教育政策研究所）
・『今日の一言』（平成29年初秋　埼玉県特別活動研究会　小池　幸）

【資料１】

《質問内容》
★私たちはよく,「友達, いる？」とか「友達, できた？」という会話をしますが, あなたは，この「友達」について，どのような関係のイメージを持っていますか。次の分類で, 一番当てはまるところ　１つ　に○を記入してください。

分類	内容	数字は人数
1	何でも話せる関係	3
2	同じ目的に向かってお互い協力協働できる関係	2
3	家等に行き来できる関係	1
4	一緒に遊びにいく関係	5
5	気軽に会話が交わせる関係	25
6	ちょっとした会話が交わせる関係	5
7	挨拶程度交わせる関係	
8	同じクラス等での顔見知りの関係	
9	その他	1

《質問内容》
★「友達」と「友達ではない」と区別するとき，その決定的な要素，理由はどのようなこととととらえますか。

・まず，顔と名前が一致する状況でないと単なる顔見知りで終わってしまう。
・相手との直接的な会話や意見交換，情報交換が継続的にも断続的にも行われること。
・１，２回話したのであっても，友達ではないと思う。
・相手のことが, わかってきた状況にならないと友達とは言えないのではないか。
・自分から積極的に関わろうとする心の作用がなければ友達とは言えないのではないか。
・一緒にいて楽しい存在。仮に，いつも一緒にいても，主従の関係があって，命令されるような関係は友達とは言えない。
・心の関係はあまりなくても，例えば，学校等の休み時間で遊ぶ場面で，自分が加われる集団のメンバーであっても，友達と認識していいと思う。
・親しさがある状況。（笑顔がない，ジョークがない，プライベートの話ができない状況はうまくないと思う。）
・いつも緊張感が支配的だと関係自体成り立たない。（あまり気をつかわない。）
・同い年の関係だと思う。先輩に対して友達という関係は自信がないし，やはり「先輩」となってしまう。気軽に相談できるとしても，友達のエリアではないと思う。もし，先輩でも上下関係を意識させない場合は友達だと思う。
・ため口で話せる関係。
・友達の概念は流動的だと思う。歳は違っても，共通の趣味が一緒の場合は友達という関係が成り立つと思う。でも，大学の部活動の関係は無理かな。
・相手への興味関心がないといけないと思う。
・いつもではないが，相手への意識が必要だと思う。

（以上抜粋）

【資料２】

《質問内容》
あなたは今，どのような他者とコミュニケーションを取っていますか。

【条件】
★多少の幅があるにせよ，コミュニケーションの回数は，だいたい週１回以上，若しくは月２回以上の回数が該当します。１回のコミュニケーションに費やす時間はだいたい５分以上とします。（挨拶のみは該当しない。会話が条件である。）
※メールやライン，電話といったものも，回数・時間の２つが条件に合致すれば該当します。
※例外として，帰省して，１年に２，３回会う友人は該当する。
★下記項目の中で，一番関係が深い項目のみ，　①　と記述する。

回答者41人
数字の単位は（人）※複数回答

	項　　目	自宅通学者		独り暮らし等	
			①該当		①該当
1	家族	21	14	19	4
2	埼工大の先生	8		6	
3	埼工大の学生課等の関係者（先生ではない人）	3		2	
4	埼工大の監督等			2	
5	埼工大の部活・同好会・サークルの友人先輩後輩	6		15	6
6	埼工大の授業での友人等	19	2	21	7
7	埼工大のゼミ，研究室の友人等			1	
8	埼工大での勉強会等のメンバー	1		2	
9	他大学の友人	13		9	
10	小学校や中学校，地域団体における児童生徒等（ボランティア含む）	3		2	
11	小学校や中学校，地域団体における高校卒業以上のメンバー	5		3	

	項　　目	自宅通学者		独り暮らし等	
			①該当		①該当
12	小学校・中学校・高等学校時代の友人・先輩等	17	1	17	4
13	小学校・中学校・高等学校時代の先生	3		1	
14	寮等の管理人や担当者			1	
15	同じ寮等のメンバーや同室の友人			1	
16	アルバイト先（スポーツジム等）の先生や担当者等	7		3	
17	アルバイト先（スポーツジム等）の児童生徒（高校生まで）	5		2	
18	アルバイト先（家庭教師）の児童生徒及びその保護者	3		2	
19	ボランティア先の高齢者や係員			1	
20	ゲームセンターで会う友人	3	1		
21	ネットゲームの友人	7	1	1	
22	ライングループの友人	11		9	
23	チャットの友人	6			
24	彼氏・彼女	3		1	1
25	その他インターネットに関する友人（外国人等含む）	3		2	
26	大学外での趣味のサークルやスキルアップのためのカルチャーセンターの友人等	1		1	
27	その他				

【資料３】

◆今日の一言　その３１６　　平成26年11月４日（火）

『力漲る（みなぎる）』

思い：静の中の動。まさに，伯仲白熱の空気が漂います。

昨日，運動公園の総合体育館で綱引き大会が行われました。本校からは４年生以上５チームが参加し，熱戦を繰り広げました。「よ～い，どん！」の合図で，一斉にスタートします。両チームが引く太縄はピンと張られ，力が拮抗し，まさに一進一退の攻防戦です。ものすごい力が加わっていますが，縄が全く動かないチーム。見ているこちらも手に汗を握ります。勝ち負けはつきますが，短時間の中で，子どもたちは力を出し尽くしました。一歩一歩成長していく子供たちの無限の可能性に微笑みながら，みんな本当に頑張りました。

◆今日の一言　その３１７　　平成26年11月５日（水）

『頼むぞ，５年生』

思い：歴史と伝統をつなぐサッカー大会。みんなでつくりあげます。

５年生のサッカー練習。それを見つめる６年生の先輩。その眼差しからは，次期最高学年への期待，後輩への思いやり，先輩としての自覚等々がうかがえます。受ける５年生は緊張の中にも何かうれしそう。さあ，もう一蹴り。サッカー大会はもうすぐそこです。

◆今日の一言　その３１８　　平成26年11月６日（木）

『みんな，聞いてね』

思い：市民会館の大ステージの眩しさを思いながら。

思わず体が動いてしまう「剣の舞」と「テキーラ」。聞く度にハッピーな気持ちにしてくれます。難しい曲を，みんなで調子を合わせながら演奏する姿に，さすが高学年の意気を感じます。そして，得意な子も不得意な子もそれぞれが精一杯に取り組んでいる，まさにチームワークそのものです。スポットライトを浴びるその瞬間，そして，拍手喝采の時に思いを馳せて。

◆今日の一言　その３１９　　平成26年11月７日（金）

『眼差し』

思い：大先輩の６年生。みんなやさしいです。

昨日は就学時健康診断でした。手伝ってくれる６年生は，緊張と言うよりは何だか余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）。新しい１年生を迎える目は，やさしさに満ちていました。６年生曰く，「私たちもこんな時があったんだね。」そう，あったんですよ。心のバトンパスは，もう始まっています。

◆今日の一言　その３２１　　平成26年11月11日（火）

『１がたくさん』

思い：結構刺激的ですね。

昨日６年生に何気なく，「明日は何の日？」と聞くと，「ポッキーの日」と間髪入れずに答えてくれました。よく聞くと，どうやらポッキーの棒が11を表しているような。そう言えば，今日は，11月11日。１がたくさん並びます。11月11日午前11時11分11秒。デジタル時計で１が10個並ぶ画面もこれまた楽し。

【資料４】特別活動における話合い（ディスカッション）の概略

◆一般的なディスカッションは，「よりよいもの，より高次なもの」等への探究や追究を主においているが，特別活動においては，それらも踏まえ，合意形成及び意思決定を目指した話合い（ディスカッション）となる。なお，話し合う内容（議題や題材）の出所は，全て日常の生活が基になっており，抽象的・一般的な内容は省かれる。 また，ディベートやシンポジウム等とも，その手法は異なる。

※支持的風土の対極は防衛的風土である。

支持的風土
◎相手を思いやる雰囲気
◎物言える雰囲気　等

自主的態度

実践的態度

◆甘くはしないが，温かく接する
◆発表者の「恥ずかしさ」を除去する
①どんな発言でも笑わない
②少数意見を尊重する
③口調や言動・動作・表情に留意する等

自分も満足みんなも満足　犠牲的な参加ではない

自分の意見が様々な課題の解決につながる

○論題，議題を確実に正面から受け止める。
○必ず，自分の意見を持つ。
スタート

○必要に応じて，司会者や記録者，発表者等の役割分担を行う。
○自分の意見を発表する。
○他者の意見に対して，疑問や肯定の思いを持つ。
○他者の意見に対して自分の思いを発表する。
○話合いを見守り，必要・状況に応じて追加発表を行う。
○合意形成若しくは意志決定の終末をむかえる。

決定事項を尊重し，実行に移す
特別活動における話合い（ディスカッション）は，常に，話合いの後に実践を目途に行われるものであり，いわゆる，話合いのための話合いになってはいけない。

このためには，これまでの知識や感情等を総合化することが求められる。
特に，今までの話合いの経験知を，常に話合い（ディスカッション）にフィードバックすることが必要である。

話合いの大前提
①論題・議題について，話し合うことを面倒くさいととらえない
②まあ，いいかという思いを持たない
③仕方なく話し合いを行わない
④すぐに集中し，他のことに話題や会話をすり替えない
⑤話合いの意義や有益性を自覚する　等

通常の話合いは，意見交換や意見確認がほとんどである。

話合い（ディスカッション）は，ある程度の時間的保証が伴う。

自発的・自治的能力の獲得

主体的参加

○一般的に，年齢に応じた望ましい自己の確立が進んでいる児童生徒の場合は，該当集団が構成された時間の長短に関係なく，支持的風土は当初からプラスととらえられる。また，支持的風土は話合いとともに相互作用し深まっていくものともとらえられる。
支持的風土は，常に深化し続けるものである。